

ラグビーW杯2003

その一 イングランド優勝おめでとう

日本代表の健闘も空しく、W杯2003は残念な結果に終わってしまった。選手諸君には心からご苦労さんと言わねばならない。苦戦の続いた準備期間から立ち直って、本番での健闘は立派なものでした。W杯2003は、観客数約184万人で五輪やサッカーW杯に次ぐグローバル大イベントになったことは実に喜ばしいことです。

イングランドの初優勝という私の予想通りに、且つ希望通りの結果に終わって本当に良かったというのが率直な感想です。1970年のイングランド協会創立100周年のセレモニーは、文字通りラグビーのグローバル化を加速しました。プロ化とW杯という二つのハードルを一挙に跳び越えて、格式と伝統を重んじる風潮を超越し、テストマッチ一本だった世界に、勝ち残り形式で順位を決める方式が採用されたのです。シーズン制との関係や、勝ち残るためのゲームづくりに懸念を残したままに発車し、回を重ねてきました。

前回まで、イングランドはトップグループに入りながらも優勝がなく、ベスト3は南半球独占という状態でした。嘗てイングランドは優勝目前に、それまでのタッチキックによる前進を否定したゲームづくりの変更から、ペースを掴めず優勝を逸した経緯がありますが、今回は、4年かけてプロ化の強力推進とフィットネスの向上を図るのは勿論のこと、プレミアリーグ創設が刺激になって選手の意欲が向上し、選手の競技生命が伸長するなどの結果手層の厚さが増し、2001～2002年へ技術的にもレベルアップして、flair溢れるrunning handling rugbyを展開し、着実に実力をつけランキングをあげてきました。プロ化によるリーグラグビーとの交流解禁による刺激とレベルアップも充実の要素ですが、そのような積み重ねの上に、W杯本番では慎重に勝ち残る手堅いゲーム運びなど、優勝への信念に徹した戦いをしました。一見、強力FWを軸に卓越したSOの技を生かすゲームづくりということになりますが、あせらずに15人一人一人が100%生きる、ステレオタイプの着実なゲームをした結果として優勝を勝ち取ったのです。

さて、次のW杯、さらに2011年に日本で行われるであろうW杯にむけて思いを巡らすとき、日本にとっての課題の多さに焦りを感じます。何よりラグビー人気低迷の現状を打破しなければなりません。変わり映えのしない、順位を決めるだけの日程消化試合が繰り返されている現状に留まらず、日本のラグビーそのものの進化向上を求めて、power and flair 展開・継続のレベルを上げて日本のラグビーを面白くすることによって、プレーヤー及び観衆の興味を増幅し、ラグビー人口を増やして、戦っては世界のトップグループへの仲間入りできることを夢んでいます。

2004.01.11
西川 義行